

雑記抄

恥かき三話

五月の中旬に悪寒・発熱・頭痛が続き、家人にやいのやいのと急ぎ立てられてハイヤーで駆け付けた初めての診療所。此所で「穴があれば入り度い」ような恥かき三話が突発、間も無く。

迂闊：「あの、済みませんが、スリッパと履き変えてください。」というやさしい小声に「えっ」と我に復つたらしい足元には現職の時から愛用の内靴。定年退職後も捨て切れずに、外靴に転用して二十年有余の代物を「あつ済みません。」といいながら玄関に戻って吃驚仰天、右隅にスリッパと履き変えの表示がきちんと…。

初診とはいえ、バリア式とはいえ、来所者の足元を見ていて見えないとはいえ、迂闊にもうっかりして注意が足りずに土足でつぶか…。もう頭の中は真っ白、外靴代わりの内靴もあわててその場で脱がずに玄関へ…。名前を呼ばれて再び我に復り、はずかしさの下向き顔でおどおど

しながら処置室に入った。此所で恥かきをまた起こすのである。平熱と変わらないのに、鼻水がやたらに激しい悪夢か…。

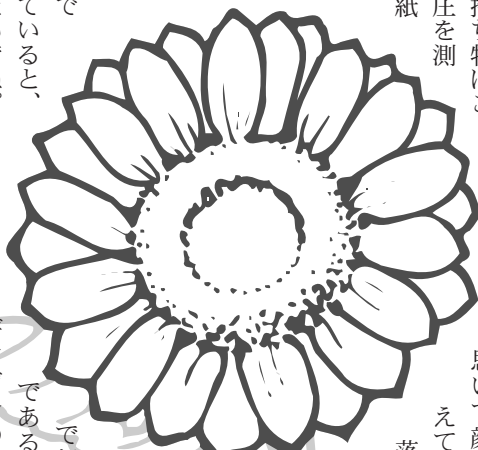
すっかり：「持ち物はこの籠に入れて血圧を測

ってください。紙コップを持って行って終わったら検査の窓口に置いてから呼ばれるまで待ってください。」と親切な看護師さん。

室内の長椅子で

「ぼうっ」としていると、「これね、忘れないでね。」と渡されたのは、帽子、半オーバー、上着の三点セット(?)すべて自分の持ち物。

再び、「そうなんだ、みんなが順番に使う持ち物置き籠なのに、置きっ放しにしたばかりに…。」と気付いた時は正に「後の祭り」。



そういえば次の年配のおばあさんは所定の籠が独占の三点だったの、その下のせまい所に置こうとしていた。すぐそばで見えていながらも手元に取り持つこともしない。診察のコールだけを待つていたのはどうしたことなのか、ああ、「まだら認知症か、遂に…。」と、すっかり自分専用籠にして平気な病人とは…と、穴にでも入り度い

思いで顔を赤くしたのは抱えていた帽子がころげ落ちた時であつた

だろうか。とにかく茫然自失ということさえ弁解も甚だしいこと…。

再び三度の恥かきはいよいよ受診で起きた「もたもた」である。椅子に座ってカーデイガンのボタンをはずそうとしてもはずれないので、「いいよ、いいですよ、そのままくり上げていいですよ。」と明るくおだやかな先生。それでも、ぐずぐずともぞもぞと、やっと五つボタンをはずしてや、おら肌着をかき上げた。先生の聴診器が胸に背中に、

「はい大きく息を吸って、吐いて」と温かく感じた。

「はい、いいですよ。」と声かけられても、ただただもうがっつきであった。

意識朦朧の状態でもない診察なのに、いつもどつたらボタンをはずして準備万端なのに、どうしてこんなにもたもたと、「御先まっくら」になつてしまったのか。お薬りをいただき、会計を済ませ、内靴を履いて帰路に着いた。ゆつくりと反省しながら徒歩でと思つたがハイヤーへの電話をかけた。

貴重な紙面で他愛無い恥かき三話の書き投ぐりをして申し訳ないけれども、「よくあること」とはいえない「うっかり、すっかり、がっかり」の三話を公開・公表・公示(?)したいわがままを平にお許し願うのみである。

とにかく、「恥の上塗り」は避けるべきことだが、思いも寄らない失敗・失敬・失念などが吹き荒さぶ時があるのも人生で、これに関わる町の風の吹き回しや如何：であろうか。

前中央分館長

尾池隆男